第IV章　考　　察

第1節　建物跡

当遺跡で検出された建物跡は，弥生時代のもの6棟(20ＦＳＫ03を含む)，古墳時代竪穴住居163棟，掘立柱建物跡40棟，奈良時代以降の掘立柱建物跡2棟などである。

(1)弥生時代

弥生時代の建物跡は，竪穴住居跡5棟（ＳＩ71・113・156・158・169）と方形の竪穴住居状のもの1棟（20ＦＳＫ03）である。いずれも弥生時代前期の中葉～後半にかけてのものであり，ＳＩ71を除いた4棟の竪穴住居は玉作り工房跡であった。これら弥生時代前期の建物跡は1号墳周辺地区にＳＩ113･20ＦＳＫ03，12Ｅ地区にＳＩ71，残り3棟は57年度調査地区に南北で3棟並んで検出された。それぞれが検出された周辺は他の場所に比べて弥生時代の土器片が非常に多く検出された。

(a)玉作り工房跡

4棟の工房跡の平面プランはＳＩ113―円形，ＳＩ156―不明，ＳＩ158―円形，ＳＩ169―隅丸方形？である。ＳＩ113は原石から両側穿孔までのほとんどの過程の管玉未製品と，軟質ジャスパーと玉髄の多量のチップ，ハンマー，玉髄製の石錐，土器転用の有孔円板が出土した。ＳＩ156はＳＩ113に加え，砥石（荒砥他）敲石，ノミ状石製品が出土した。それぞれの工房跡からは一様に多量の軟質ジャスパーのチップと玉髄のチップが検出されている。玉作りの技法も全くといってよいほど差はなく，同一の集団の持っている技法と考えてよいだろう。5～6棟の建物跡で推論するのは危険だが，弥生時代の竪穴住居跡に対する工房跡の比が大きい事は，玉作りを専業的にもつ集団を考える事ができよう。遺跡内での同時期の住居跡からはその製品の出土例がない。同時期の墓からは硬質の碧玉製の細い管玉を伴う例が2例（ＳＸＹ01，ＳＸＹ03）みつかっており，工房跡の製品とみられるものはない事から，専業集団の作った製品はどこかへ運ばれたものであろう。

(b)住居跡地

ＳＩ79は（工房跡を除いて）唯一の竪穴住居である。円形のプランをもち，構造柱は4本，主な出土遺物は土器の他に局部磨製の大型の打製石器（ナタ状，ラケット状石器他）がある。20ＦＳＫ03は西側の範囲は不明瞭ながらも全体に方形をなし，東側に柱穴らしいものを2個検出している事から建物跡と考えた。また，それぞれに検出された地区では弥生前期の土器片が他の場所に比べて極めて多く，換言すれば他の地区には弥生時代の竪穴住居の存在する可能性は少ないと考えられる。

これら6棟の建物跡は，ほぼ同時期のもので，出土地点が南側の湿地跡に近い所に見られる事は次の2つの理由が考えられる。1つは砂丘地の後背湿地である南側の湿地を水田として利用していたため，その近接した場に建物を設けた。もう1つは砂丘地が安定した状態になったとはいえ，なお北側では季節風で砂の移動がみられ，北側は建物を設けるには不適当なため。という推測である。(北側に全く遺構がない訳ではない。) この地区の場合，弥生時代の井戸跡がない事も含めて前者の理由で南側に建物跡がみられたと考えた方が良いだろう。

(2)古墳時代

この遺跡の地形は縄文後期以後の海退を主な原因としてできた海岸砂丘の地形である。砂丘地が安定したのは遺物などから縄文時代晩期頃かと思われる。安定（砂丘地の上面が黒砂化する）する際当時の地形をほとんどくずしていないと思われる。黒砂自体の地形は16K～16F～11Dのラインで高く，北側はほぼ平坦な地形を示す。黒砂層が検出されなかった部分は，近世に入って再び砂丘活動が活発になった際吹き飛ばされたものであろう。(平坦な地区にあった3・4・10号墳の墳丘はこのときに白砂が覆いきれなかった部分だけ飛ばされたものである。) この黒砂のない部分を復元すると18K～18F～12D地区にかけて8～3mくらいの尾根が復元できる。この尾根と13A地区から西に伸びる粘土層とは砂丘地におけるスリバチ状地形と酷似している。12号墳付近から15A付近まで約60mにわたり黒砂層が発見できなかったのは尾根部分が飛ばされ，さらに尾根から低地までの急斜面が，後世に後背湿地の水位の異常な上昇などでくずされたと考えることができよう。

以上の事から弥生時代からほぼ安定した黒砂層は高浜の地をほとんど覆い，黒砂層下の砂丘の地形そのままを黒砂上に見ることができる。住居跡はこの黒砂層の大小の起伏を利用して作られており，便宜上次のように区分する。1号墳周辺地区—A区，35号墳～58号墳～3号墳～81号墳～25号墳に囲まれる部分—B区，81号墳・25号墳・89号墳—C区，B区の北東側—D区，B・D区の北側—E区。（挿図354，P323参照）

A区は15棟の竪穴住居跡と9棟の掘立柱建物跡がみられる。古墳時代はもう少し黒砂が南に伸びていたと思われる。住居跡の時期は長瀬Ⅰ期から古墳時代中期中葉まで作られ，1号墳の築造直前まで建物跡は残っていたであろう。掘立柱建物跡が多いものA区の特徴である。

B区は「L」の字形尾根のふところにあたる部分で，わずかの斜面に立地した住居跡は軸方向を等高線と平行に設けている。分布は斜面部に近い部分で密になり，D区に近い部分で疎になる。この区には井戸跡が4基あり，いずれもGラインより南に位置する。特にSE04の周囲には住居跡が密集する。また方形周溝状遺構（SZ01・02）も2基この地区で検出している。掘立柱建物跡はSE04の周囲，2号墳周辺の2ケ所に集中する。竪穴住

居跡は長瀬Ⅰ～Ⅲの3時期に分かれ，Ⅱ期の住居跡が大部分である。

C区は81号墳から25号墳に続く尾根の東側にあたり，89号墳の北側に住居跡の集中する部分がある。特にこの地区は古墳時代後期の住居跡がみられ，中期を下限として集落が大きく移動したのではなく，近接地に移動し，この地に墳基を作った事が推測される。

D区は高浜のムラの中でも中心部と言うべき場所で（さらに北・東に伸びる平坦地を含む）この地区には特殊大型高床建物跡（ＳＢ40）をはじめ，ＳＢ29・30などの大型の建物跡が検出されている。他地区に見られるような掘立柱建物跡はなく，竪穴住居跡も軸をほぼそろえている。銅鐸をはじめ，銅鏃も集中して検出された。

E区は調査面積が少なく，概観は述べがたいが，素文鏡が住居跡から2面出土しており，総柱の掘立柱建物跡など，他地区とは性格を異にしている部分もある。

(a)竪穴住居跡

検出された竪穴住戸は長瀬Ⅰ期（古墳時代前期後半）から古墳時代後期前半までのものである。大部分が長瀬Ⅱ期のものである。平面プランはほとんど方形ないし隅丸方形で五角形のもの6棟，六角形のもの2棟，多角形～円形のもの3棟である。総じて隅丸方形のものは古く，コーナーの丸味が少ない程時期は新しくなる傾向にある。特殊ピットは埋砂が黒く，(淡黒色)他のピットと容易に判力ができる。特殊ピットを持つもののほとんどは中央に位置する。住居跡内に焼砂の見られる例はほとんどなく，ＳＩ69・127・147などである。また側溝を持つ住居跡はＳＩ25・34・35・42・43・45・58・61・62・114・117・127など少数である。階段状の住居跡あるいはベッド状遺構をもつものは，ＳＩ05・43・58・85・92・120・124などの住居跡である。

側溝を持つ住居跡が少ない事は比較的乾燥しやすい立地にある為と思われる。焼砂がほとんど検出されなかった事については，屋外での炊飯・季節的住居など多くの事例が考えられるが，まだ推定できる根拠がない状態である。

(b)掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は古墳時代のもので40棟検出されており，内訳は1×2間のもの28棟，1×1間のもの3棟，1×3間のもの2棟，1×4間のもの1棟，2×2間のもの2棟，2×3間のもの2棟，2×2間の総柱のもの1棟，不明のもの1棟である。掘立柱建物跡の中で大型のもの（ＳＢ29，30，40）はD区にあり，これらはその規模，遺構の形状から倉庫と考えがたく，住居などの目的で作られたものと思われる。それに対し，他の掘立柱建物跡はいずれも南側の湿地跡に近い部分に作られており，（D区ではわずかにＳＢ21だけである。）倉庫として作られた事をうかがわせる。A区に掘立柱建物が多いのは湿地に至るまでの黒砂の勾配が他のように高くない事と，湿地が南側と西側（f_2地区）に開けていることからであろう。

(3)奈良時代以降

奈良時代以降の建物跡ＳＢ37・41・42である。ＳＢ41は１×３間，ＳＢ37は１×１間でともに８世紀代のものである。ＳＢ42は奈良時代～平安時代のものかと推定される。ＳＢ37は方形の掘り方を持ち，周囲には墨書土器を多量に検出した。同時期の銅製銙帯も近くで出土していることから(15K地区でも同様のものが出土している)，ＳＢ37は当時政治機構の末端部の役目を持った建物と考えることができよう。

砂丘地は水はけが良く，飛砂のない所では快適な土地としてムラを形成するには適した場所である。特に長瀬高浜は南側・西側に湿地帯をもち，北側には広い平坦部が続いているため，時期を問わずこの広い黒砂の広がりに少しずつ移動をくり変えしながら中世まで住居と墓を作りつづけてきたと思われる。

SI番号	平面形 主軸	長辺(m) 短辺(m)	面積(㎡) 構造柱	特殊ピット 位置	出土遺物・備考	
01	方形 N－5°－W	(5.3) 4.2	(24) (4)	— —	土器口，鎌，管玉	長瀬II期
02	方形 N－25°－W	(8) 7.1	(43) 4	楕円形 中央	土器１，鎌，鉇４，鉄鏃４，刀子 棒・板状鉄製品６	—
03	方形 N－35°－E	— 4.6	— 2	— —	土器10，曲刃鎌，小玉	長瀬II期
04	多角形 —	— —	— —	楕円形 やや北	土器８，棒・板状鉄製品７，勾玉２	長瀬II期
05	隅丸方形？ —	— —	— —	— —	土器38，釣針，刀子，棒・板状鉄製品４	長瀬II期
06	方形 N－45°－E	6.5 4.5	29.3 —	— —	土器17，板状鉄製品	長瀬III期
07	方形 N－50°－E	3.3 3.3	10.1 —	— —	土器３	長瀬II期
08	隅丸方形 N－73°－E	4.0 2.6	10.5 —	— —	土器７	長瀬III期
09	方形 N－52°－E	4.1 3.5	14.3 2	楕円形 西側	土器２	長瀬II期
10	方形 N－35°－E	3.0 2.4	7.3 —	— —	土器８，棒状鉄器２，砥石２	長瀬III期
11	隅丸方形 N－85°－E	4.9 4.3	20.4 4	円形 中央	土器14，鉇，棒・板状鉄器２，管玉	長瀬II期
12	隅丸方形 N－67°－E	6.6 5.7	37.6 4	楕円形 中央	土器21，釣針，鉄鏃，棒状鉄器，砥石	長瀬II期
13	五角形 —	(7.9) (7.8)	55.8 5	— —	土器１，釣針，板状鉄器	長瀬II期
14	隅丸方形 N－80°－E	4.5 3.9	16.0 4	円形 中央	刀子	—
15	— N－24°－E	4.8	— 4	楕円形 中央		—
16	隅丸方形 N－46°－W	5.0 4.8	24.0 4	楕円形 やや西	鉄斧	—
17	方形 N－65°－E	4.9 4.4	20.4 4	円形 中央	土器１	—
18	方形 N－23°－W	5.0 4.9	24.5 4	楕円形 中央	釣針	

表15　竪穴住居一覧表その１

19	方形 N−72°−E	4.4 3.6	15.6 2	− −	土器 9	長瀬III期
20	方形 N−55°−E	4.7 4.5	21.2 4	楕円形 −	土器 8	長瀬II期
21	方形 N−0°−E	2.9 2.7	7.8 −	− −	土器28	長瀬III期
22	方形 N−45°−E	3.4 2.6	8.8 −	− −		−
23	隅丸方形 N−76°−E	4.4 4.1	16.1 4	円形 やや西	土器 8，砥石，擦り石 2	長瀬II期
24	方形 N−0°−E	4.3 3.6	15.5 2	円形 東側	土器 8，刀子	長瀬III期
25	方形 N−70°−E	7.3 6.4	47.9 2	− −	土器41，釣針，管玉2，小玉 側溝をもつ。	長瀬III期
26	− −	4 3	7.9 −	− −		−
27	方形 N−86°−E	4.9 3.5	17.0 2	楕円形 中央	土器 3	長瀬 I 期
28	方形 N−71°−E	4.4 4.3	24.0 4	− −		長瀬 I 期
29	五角形？ −	− −	(58) 5	不定形 中央	土器11，曲刃鎌，鉄斧，釣針，板状鉄器， 管玉，軽石	長瀬II期
30	隅丸方形 N−71°−E	4.5 4.4	19.8 4	− −	土器 9	長瀬 I 期
31	五角形 −	(6.8) (6.4)	43.5 5	円形 中央	土器 8	長瀬II期
32	隅丸方形 N−50°−E	5.3 5.3	27.7 4	円形 中央	土器19，鉄鏃 3，刀子，板状鉄器 2	長瀬II期
33	隅丸方形 N−84°−E	5.9 (4.3)	(31) 4	円形 やや東	土器18，刀子，板状鉄器	長瀬 I 期
34	隅丸方形 N−52°−E	6.3 6.2	38.8 4	楕円形 やや北	土器20 側溝をもつ	長瀬II期
35	隅丸方形 N−55°−E	4.3 4.3	18.7 4	円形 中央	土器 6 側溝をもつ。	長瀬 I 期
36	方形 N−58°−W	4.2 3.4	23.2 4	円形 中央	鉄鏃 2，板状鉄器，管玉 2，なつめ玉， 未製品，勾玉	−
37	隅丸台形 N−55°−E	4.8 3.5	19.7 4	円形 南側	土器10，棒状鉄器	長瀬II期
38	隅丸方形 N−67°−E	5.9 5.9	(28) 4	円形 中央	土器 4，砥石	長瀬 I 期
39	隅丸方形 N−55°−W	(4.5) 3.7	(16.5) 4	− −	土器 9	長瀬II期
40	方形 N−72°−E	3.7 3.3	12.2 −	− −	土器12	長瀬II期
41	方形 N−68°−E	4.3 3.6	15.8 2	楕円形 北側	土器15，剣先型鉄製品，鉄長，管玉	長瀬III期
42	隅丸方形 N−79°−E	5.3 5.3	31.1 4	円形 中央	土器16，剣先型鉄製品，棒・板状鉄器， 砥石，側溝をもつ。	長瀬II期
43	隅丸方形 N−67°−E	6.4 5.8	37.5 4	円形 中央	土器18，剣先型鉄製品 2 側溝をもつ。	長瀬 I 期
44	方形 N−0°−E	4.2 −	− 4	− −	土器 3	長瀬II期
45	方形 N−60°−E	5.2 4.6	(23.7) 4	楕円形 やや南	土器 5，剣先型鉄器 2，管玉 側溝をもつ	長瀬 I 期
46	方形 N−50°−E	4.5 3.4	(16) −	− −	土器 4，砥石，管玉未製品	長瀬 I 期
47	隅丸方形 N−60−W	4.5 4.2	20.6 4	− −	土器10，甕形土器 2，鉄鏃 4，釣針	長瀬II期

表16　竪穴住居一覧表その 2

48	五角形	5.6 5.5	30.5 5	円形 中央	土器14，剣先型鉄製品３，鉄鏃	長瀬II期
49	方形 N－53°－E	(3) 2.9	(9) —	— —	土器２，手焙型土器，剣先型鉄製品	長瀬II～III期
50	方形 N－35°－W	— 3.1	— (4)	円形 中央	土器１	長瀬III期
51	隅丸方形 N－60°－E	4.6 3.4	15.8 2	円形 北側	土器６，棒状鉄器	長瀬III期
52	隅丸方形 N－38°－E	4.4 —	— 2	円形 やや東	土器１	長瀬III期
53	方形 N－40°－E	5.4 —	— —	— —		長瀬III期
54	隅丸方形 N－62°－E	4.2 3.9	16.4 2	円形 やや東	土器10，釣針	長瀬Ｉ期
55	方形 N－56°－E	3.9 2.9	11.4 (4)	楕 南側	土器２	長瀬II期
56	隅丸方形 N－58°－E	4.4 4.3	19.3 4	楕円形 やや南	棒・板状鉄製品４	長瀬II期
57	隅丸方形 N－52°－W	6.5 5.5	35.5 (4)	— —	棒・板状鉄器７，鍬先，刀子，剣先型鉄器，勾玉・管玉未製品，砥石，三角状鉄器	長瀬Ｉ～II期
58	隅丸方形 N－49°－E	4.9 3.4	16.5 —	— —	土器14，テラス	長瀬Ｉ期
59	方形 N－43°－E	5.8 4.0	24.9 2	円形 中央	土器８	長瀬II～III期
60	隅丸方形 N－30°－E	4.8 3.0	14.4 2	楕円形 西側	土器８，擦り石２，砥石	長瀬III期
61	方形 N－55°－E	5.7 5.7	34.2 5	楕 中央	地器４，棒・柱状鉄器３ 側溝？	長瀬Ｉ期
62	隅丸方形 N－32°－E	— 3.3	— —	— —	土器２ 側溝	長瀬II期
63	隅丸方形 N－36°－E	5.0 4.9	24.7 4	三角形 やや東	土器６，鉄器	長瀬II期
64	隅丸方形 N－68°－E	2.9 2.7	7.9 —	— —	土器６	長瀬III期
65	隅丸方形 N－5°－E	3.2 2.7	8.6 —	— —	土器	長瀬Ｉ～II期
66	隅丸方形 N－17°－E	4.8 4.6	22	楕円形 中央	土器10，板状鉄器 側溝？	長瀬Ｉ期
67	方形 N－84°－W	5.0 2.2	11 —	— —	土器	長瀬II期
68	方形 N－25°－W	— 3.3	— —	— —	土器４	長瀬Ｉ期
69	隅丸方形 N－75°－W	5.3 4.6	24.1 4	円形 中央	土器147，釣針２，剣先型製品４，鉄鏃，棒状鉄器４，管玉４，小玉４，鉄剣，焼砂	長瀬Ｉ期
70	方形 N－15°－E	4.4 3.0	15.8 2	— —	土器５，棒状鉄器２	長瀬II期
71	円形	径6.1	29.2 4	— —	土器36，鉈状石器，局部磨製石器，ラケット状石器，打製石器２，擦り石	弥生時代前期新
72	隅丸方形 N－73°－E	5.1 4.5	22.9 4	— —	土器５	長瀬III期
73	隅丸方形 N－7°－W	5.2 5.0	25.8 —	— —	土器４，刀子２，棒・板状鉄器３	—
74	隅丸方形 N－75°－E	(3.7) 2.7	(10.5) (2)	円形 中央	土器9，釣針	長瀬Ｉ期
75	— —	— —	— —	楕円形 やや東	土器４，コップ型土器，棒状鉄器	長瀬Ｉ期

表17　竪穴住居一覧表その３

76	方形 N−50°−E	6.3 5.6	35.3 4	円形 中央	土器２，板状鉄器	長瀬II期
77	方形 N−53°−E	1.9 1.6	3.0 —	— —	土器	長瀬II期
78	方形 N−53°−E	4.9 2.6	12.7 2	楕円形 やや南	土器15，鉄鏃	長瀬II期
79	方形 N−53°−E	3.0 2.9	(8.7) —	— —	土器２	長瀬II期
80	方形 N−64°−E	3.0 2.0	(6.0) (４)	円形 中央	土器６，釣針２，棒・板状鉄器，土玉	長瀬II期
81	方形 N−70°−E	7.7 5.8	44.6 4	方形 やや南	土器25，製塩土器，棒状鉄器，小玉，砥石	長瀬II期
82	方形 N−66°−E	3.5 3.2	11.2 2	— —	土器19，曲刃鎌，釣針，三角状鉄器	長瀬II期
83	方形 N−54°−E	4.1 3.8	15.8 2	円形 中央	土器８，板状鉄器，勾玉	長瀬III期
84	隅丸方形 N−38°−E	5.0 4.9	24.5 4	— —	土器17，鉇，棒・板状鉄器３，敲石２，軽石	長瀬II期
85	方形 N−38°−W	4.7 4.1	18.9 4	楕円形 中央	土器39，棒・板状鉄器３，刀子，勾玉，土錘，軽石，テラスを持つ。6.2×5.4，18.9m²	長瀬III期
86	— —	— —	— —	— —	土器８，棒状鉄器２，石匙	長瀬III期
87	方形 N−５°−E	5.5 4.3	23.2 2	— —	土器，棒状鉄器，銅鏃	長瀬II期
88	方形 N−28°−W	5.7 4.4	25.1 2	— —	土器56，甑形土器，鉄鏃，銛先，磨石	長瀬II期
89	方形 —	— —	— (２)	—	土器２，鉄長，銛，小玉	長瀬II〜III期
90	方形 N−40°−E	— 4.1	— 2	— —	土器21，甑形土器，鉄鏃２，剣先型鉄製品，棒状鉄器６	長瀬II期
91	隅丸方形 N−13°−W	4.4 4.0	16.2 2		土器８，鉄釣針１	長瀬Ｉ〜II期
92	方形 N−26°−E	— 3.0	— 2	— —		古墳時代中期
93	方形 N−３°−E	5.7 5.6	32.5 4		土器８，須恵器３	古墳時代中期中葉
94	五角形 N−82°−W	5.3 4.8	26 2		土器14，弥生土器２，土玉２，勾玉１，管玉１	長瀬II〜III期
95	方形 N−13°−E	6.6 5.8	38 4		土器11，弥生土器３，滑石小玉１，鉄製鎌１	古墳時代中期前半
96	方形 —	— —	— —	— —		長瀬II〜III期
97	方形 —	— —	— —	— —		長瀬II〜III期
98	隅丸方形 N−13°−W	4.5 4.4	19.8 4	—	土器５	長瀬II期
99	不整楕円形 N−20°−W	6.8 5.4	34 —	—		長瀬Ｉ〜II期
100	隅丸方形 N−80°−E	5.9 3.9	23 2	円形 やや東	土器48針釣，板・棒状鉄器，舌状鉄器，素文鏡，管玉，小玉３，勾玉，砥石，敲石，磨石，軽石	長瀬II期
101	五角形 —	5.8 5.3	25 5	円形 中央	土器14，棒状鉄器２，勾玉，石製有孔円板２	長瀬II期
102	方形？ —	— —	— —	— —	土器11，敲石，軽石，砥石	長瀬II期
103	隅丸方形？ —	— —	— —	— —	土器14，鉄鏃	長瀬II期

表18　竪穴住居一覧表その４

104	隅丸方形 N−12°−E	3.6 3.0	11.0 2	楕円形 中央	土器6，管玉	長瀬II期
105	方形 N−　°−	2.6 2.5	6.6 —	— —	土器11，棗玉	長瀬II期
106	方形 N−57°−E	3.6 3.5	12.5 2	— —	土器14，土錘	長瀬II期
107	方形 N−28°−W	3.5 3.2	11.0 2	— —	土器6，勾玉，施溝石	長瀬II期
108	方形 N−15°−E	5.1 4.1	24.2	円形 やや北	土器32，管玉，磨石	長瀬II期
109	方形 N−68°−E	3.4 2.7	9.4 2	— —	土器4，板状鉄器 補助柱2本	長瀬II期
110	方形 N−12°−E	5.3 4.1	21.7 (4)	楕円形 中央	土器15，土玉	長瀬II期
111	方形 N−79°−E	3.0 3.0	9.0 2	円形 中央	錘 補助柱をもつ	長瀬II期
112	隅形方形 N−7°W	5.2 4.6	24 4	円形 中央	擦石 側溝？　土器埋納土壙	長瀬I期
113	円形 —	9.0 8.5	38 6		玉作工房跡，土器転用有孔円板，ハンマー，管玉未製品，メノウ針	弥生時代前期
114	方形 N−27°−W	6 6	36 4	円形 やや北	砥石2，有溝軽石 側溝	古墳時代 中期前半
115	方形 N−14°−E	4.8 4.6	22.1 4	— —	剣，玉，鉢 補助柱をもつ	〃
116	方形 N−22°−E	2.1 1.8	3.8 2			長瀬I期
117	六角形 N−　°−		30.0 8	円形 中央	鈎針1，棒状鉄製1，勾玉2，管玉2，臼玉1，土錘2，擦石1	長瀬III期
118	方形 N−2°−W	5.0 4.5	22.6 4	円形 中央	曲刃鎌1，砥石1	長瀬I期
119	— N−　−					長瀬II期
120	長方形 N−7°−W	3.6 3.4	12.2 4	楕円形 中央	鉄鏃2，管玉1，土玉1	長瀬I期
121	方形 N−60°−E	4.8 3.8	18.4 4	— —	砥石2	長瀬III期
122	隅丸方形 N−43°−E	4.8 4.5	21.6 2	— —	刀子4，舌針1，管玉，砥石1	長瀬II〜III期
123	方形 N−32°−W	5.3 4.8	25.6 2	楕円形 中央	錘1，勾玉2，小玉1	長瀬III期
124	方形 N−173°−E	7.3 6.7	19.4 4	円形 中央	板状鉄製品1，棒状鉄製品1，剣先型鉄製品1	長瀬II期
125	方形 N−25°−W	6.5 6.2	45.3 4	— —	敲石1，軽石1	長瀬III期
126	方形 N−25°−W	4.8 —	— 4	楕円形 中央	鈎針1，刀子2，棒状鉄製品1，剣児型鉄製品1	長瀬II期
127	円形 —	9.4 9.1	49.7 6	円形 中央	銅鐸1，曲刀鎌2，刀子4，錘3，板・棒・針・剣先型鉄器11，鈎針1，鉄鏃1，小玉1，	長瀬II期
129	隅丸方形 —	— —	— (2)	— —	棒状鉄製品1，勾玉2，砥石1	長瀬III期
130	方形 N−29°−E	3.6 3.5	12.7 2	— —	棗玉1	長瀬III期
131	隅丸方形 N−65°−E	5.0 4.7	23.3 4	楕円形 中央	鉄鏃2，針状鉄器1，剣先型鉄器1，板状鉄器，1小玉1，管玉1，砥石1，線刻石，軽石1	長瀬III期
132	隅丸方形 N−21°−W	6.3 6.0	31.0	円形 やや南	鉄鏃4，棒状・剣先型・針状鉄製品4，刀子1，鈎針3	長瀬I〜II期

表19　竪穴住居一覧表その5

133	五角形	6.6 6.4	30.9 5	楕円形 中央	曲刀鎌1，鉤針1，爪型鉄器1，板状鉄製品1	長瀬III期
134	六角形 —	2.6 2.5	— 6	— —	鉤針1，棒状鉄器3，爪型鉄器1，ノミ状鉄鏃1，ノミ頸鉄鏃1。	長瀬II期
135	隅丸方形 N−28°−W	4.5 4.5	20.3 4	楕円形 中央	鉄鏃1，タガネ状鉄製品。敲石1	長瀬II期
136	方形 N−21°−W	4.7 4.5	21.2 4	— —	剣先型鉄製品1，鉄鏃1，軽石1	長瀬II期
137	方形 N−31°−W	— 3.2	— (1)	— —		長瀬I〜II期
138	隅丸方形 N−18°−W	6.0 4.9	17.6 4	楕円形 中央	素文鏡1，刀子1，鉄鏃4，板状・棒状鉄製品2，鉇1	長瀬II期
139	方形 —	4.6 4.6	17.6 —	— —	板状鉄製品1，管玉2	長瀬III期
140	(方形) N−19°−W	5.0 4.7	23.4 4	— —	砥石1	長瀬III期
141	(方形) N−62°−W	4.5 4.5	20.2 4	円形 中央	擦石1	長瀬II期
142	円形 —	7.5 7.5	44.2 6	円形 東より	鉇1，鉄器3，刀子3，鉄鏃，曲刀鎌1，加工石1，敲石1	長瀬II期
143	(方形) N−80°−W	4.6 4.5	20.8 —	— —		長瀬II期
144	五角形 —	6.8 6.7	45.7 5	— —	鉄鏃1，刀子1，土錘1	長瀬II期
145	方形 N−25°−W	5.2 4.8	25.0 4	楕円形 中央		長瀬I期
146	方形 N−7°−W	(5.2) —	36.0 (4)	円形 南より	剣先型鉄製品1，板状鉇製品1，鉄鏃1，凹石1，	長瀬II期
147	方形 N−41°−W	6.0 5.8	(35.0) 4	円形 中央	鉤針1，棒状鉄製品1，鉄鏃1，曲刀鎌1，刀子1，土玉6	長瀬I〜II期
148	方形 N−5°−W	4.7 4.7	22.5 4	— —	板状鉄製品1，ノミ状石製品1，軽石3	長瀬I期
149	方形 N−10°−W	(4.8)	— (4)	円形 南より		古墳後期前半代
150	方形 N−47°−E	6.0 3.2	18.7 2	円形 中央	刀子1，碧玉1	長瀬II期
151	隅丸方形 N−45°−W	— —	— (4)	— —	管玉1	長瀬II期
152	隅丸方形 N−50°−E	4.4 3.6	15.8 4	— —	土錘2，軽石2，刀子1	長瀬II期
153	方形 N−54°−E	4.6 4.0	17.9 4	円形 中央	刀子1，剣先型鉄製品1，棒状鉄製品1，異形玉1，管玉1，砥石1	長瀬III期
154	方形 N−47°−E	5.0 3.7	18.4 2	— —	剣先型鉄製品1，棒状鉄製品1，削器？1，磨石1，台石1	長瀬II期
155	方形 N−30°−W	5.3 5.3	28.1 4	円形 東より	鉇？1，鉤針1，石斧2，敲石1，台石1	長瀬II期
156	円形 —	6.2 6.1	28.7 6	円形 中央	玉造工房跡。管玉未製品，メノウ針，砥石3，石鏃2，ノミ状石製品2，石器1，敲石2	弥生時代前期
157	(方形) —	— —	— —	— —		長瀬III期
158	— —	— —	— (4)	楕円形 (西より)	玉造工房跡。	弥生時代前期
159	方形 N−46°−E	5.1 3.2	16.5 2	— —	石　1。	長瀬II期
160	(方形) N−31°−W	— —	— (4)	円形 中央	紡錘車2，石斧1，軽石1	—
161	方形 N−42°−W	5.3 4.6	(25.5) (4)	楕円形 中央	石斧1	長瀬I期

162	方形 N−38°−W	(4.5) —	— 4	楕円形 中央	刀子1，土玉1，石鏃1	長瀬II期
163	方形 N−49°−E	4.3 3.6	15.2 2	— —	板状鉄製品1，管玉未製品2，砥石1，磨石1，石斧1	長瀬III期
164	方形 N−40°−W	3.4 2.8	9.5 4	円形 中央	管玉1	長瀬I期
165	方形 N−5°−W	5.0 3.5	17.6 2	円形 中央	鉄鏃1，台石1	長瀬I〜II期
166	(多角形) —	— —	— —	— —	鉄鏃1，棒状鉄製品1，小玉1	長瀬I期
167	方形 N−9°−W	(5.0) —	— (4)	— —		—
168	長方形 N−9°−E	(6.2) 3.6	(22.8) (2)	— —	刀子1，石鏃1	長瀬II期
169	(不整円形)	— —	— —	— —	玉造工房跡。管玉未製品，メノウ針	弥生時代前期

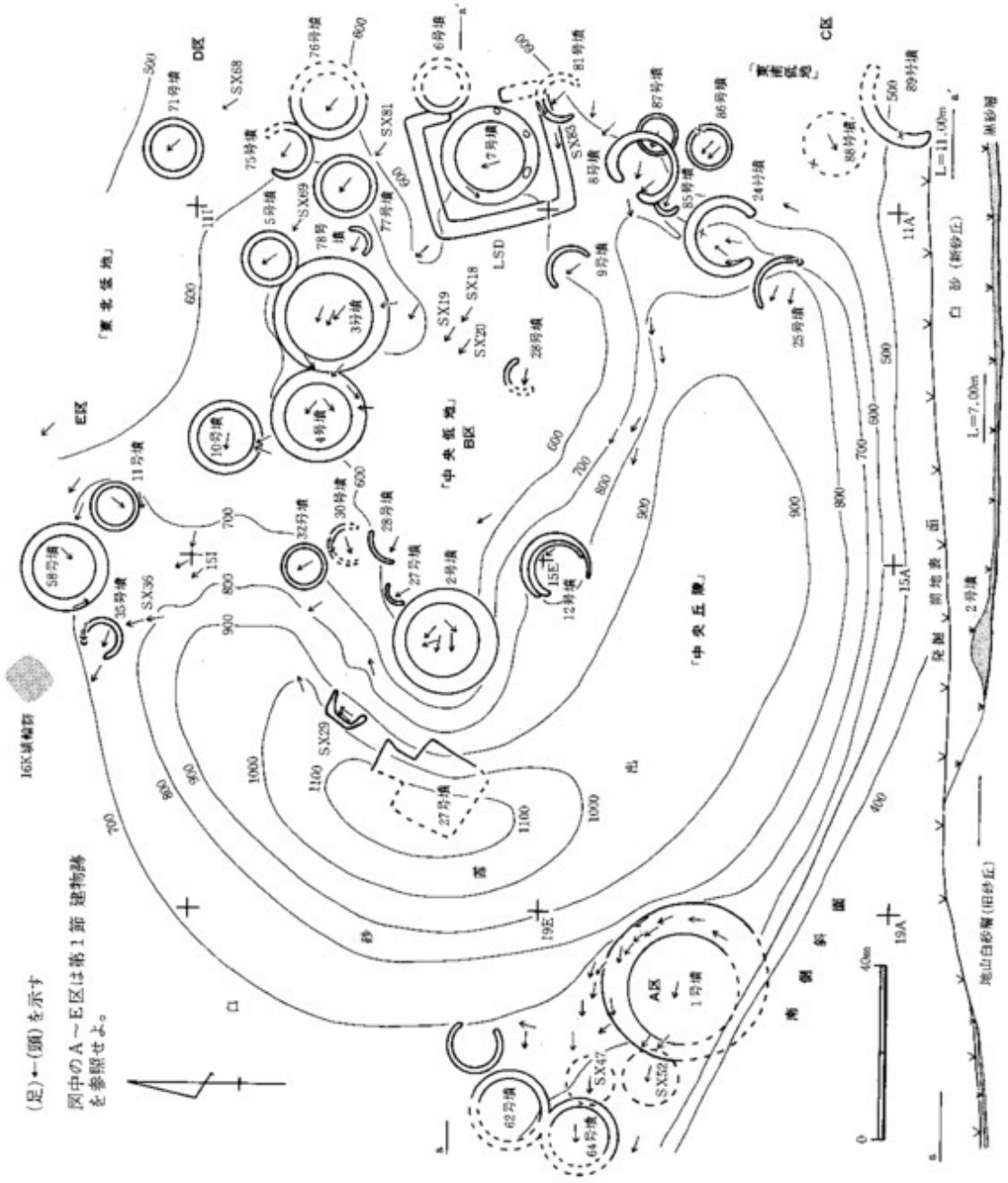
第2節　長瀬高浜遺跡における古墳群に関する一考察

長瀬高浜遺跡の5年余に及ぶ発掘調査の結果，多数の遺構の存在が明らかとなった。縄文土器が検出された他，弥生時代前期〜中期初頭から古墳時代をへて中世に至るまでの複合遺跡である事が判った。墳墓では弥生時代前〜中期の土壙墓群，古墳時代中・後期の古墳，土壙墓，石棺墓群，中世の土葬墓，火葬墓が確認された。なかでも古墳時代は，この地がもっとも活発に利用された時代の1つで，発見された墳墓は90基にも及んでいる。ここでは古墳時代の墳墓について総括し，若干の考察を加えたい。

墳墓の内訳は方形周溝墓1基（SX29），前方後方墳1基（SX26）の他は円墳で37基認められた。埋葬施設の内訳は箱式石棺墓59基，木棺墓23基，土壙墓22基，土器棺墓4基の他，円筒埴輪棺墓が13基みられた。単独の墳墓と考えられる周溝を持たない石棺などや，1mに満たない小規模な石棺も多かった。円墳の規模は1号墳で最大で周溝総径が33.3m，それに次ぐ2，3号墳が26mの他は，20mから10m弱のもので12〜13m前後の円墳が多い。大まかには5世紀中葉〜6世紀末に比定しうる古墳群で，7世紀代の土壙墓も若干みられる。これらは全て現在の砂丘地の白砂深く埋もれていたのである。

その分布状況と埋葬遺体の頭位方向を挿図354で示した。また形態，規模，頭方位，枕の形態，副葬品，棺内塗彩の有無，遺体の遺存状況，その推定年令について**表24**でまとめた。それに基づいて**挿図356**で棺の内法と形態を図化した。**表20**で頭方位，**表21**で各墳墓の推定築造時期を示した。

これらを概観して気づくのは，箱式石棺を中心主体とする古墳が多い事（37基中19基），棺内に土器・板石を利用した枕をもつ例が多い事，頭方位は南東が多い事，また規模のきわめて小さい石棺が多くみられる事である。円筒埴輪棺も16K埴輪群との関係を考える上で注目すべき資料である。



挿図354　長瀬高浜古墳群分布概念図及び埋葬遺体頭位方向図

〈古墳の形態について〉

周溝を確認した古墳は37基ある。また周溝は検出できなかったが調査時に周溝をもつ可能性が強いと判断した墳墓はＳＸ47，88の２基あり，その他にも円弧状にめぐる溝が幾つか検出されているにもかかわらず埋葬施設が確認できなかったため古墳と判定できなかったものもある。また当節をまとめる段階で,埋葬施設の状況等から墓域をもつ墓であったと

推定しうる状況に至った墳墓も幾つかある。

墓域をもつ墳墓ともたない墳墓の分類概念は，観念的作業としては重要だが，現実には適用する事がなかなか困難な概念である。墳丘，周溝等が顕著に築造されていない場合には掘り飛ばしてしまう事もある。当遺跡の場合で言うなら，周溝築造時の掘りさげが地山の白砂に達していなければ，周溝だけでなく墳丘も黒砂層内にあって識別しにくい。周溝が確認できた古墳の中で墳丘を高く盛っているのは1～4・8・10・24・25号墳の8基だけで，他の古墳については，地山面で周溝もしくは埋葬施設を検出してはじめて古墳とわかった。築造時には黒砂の地表面は地山面よりある程度高かったはずだから，埋葬施設上の盛り砂の有無にもよるが，これらの古墳はほとんど墳丘をもたない，単に周溝を掘りこんだだけの古墳だったと考える。墓域をもつ墳墓ともたないものの概念用語はまだ十分整理されたものではないが，ここでは「有墓域墓」「無墓域墓」を用いたいと考える。

これらの墳墓の中で特にきわだったものは1号墳で，規模も最大であり葺石をめぐらし周溝内に14基の埋葬施設（箱式石棺墓9基，円筒埴輪棺墓4基，石蓋土壙墓1基）を伴う円墳である。中心主体は箱式石棺で，厚い板石を2枚に剝したものを側壁とし，礫床をもち，入念に粘土貼りが施こされていた。遺体は熟年女性でほぼ完全に人骨が残っていた。頭蓋骨は3個の高坏を組み合わせた土器枕にのせてあり，全体に赤色顔料が塗られ，額部に竪櫛がおかれていた。遺体の右手横には組紐を入念に巻いた鉄刀が副葬されていた。古墳時代の葬送祭祀を考える上で豊かな資料である。5世紀後半（陶邑TIのIV）の須恵器を伴う。（報告書V本文編，P48f参照）

2号墳は6世紀後半の円墳で中心主体はやや幅の広い箱式石棺である。両側に須恵器蓋坏C陶邑IIのIV）が，一方はV字状にならべられていた。枕として置かれていたものと考える。

遺物は全体に少なく，77号墳第1埋葬施設（77①と記す，以下同じ）で約1000個の小玉，勾玉類（滑石など）が出土した他は，鉄刀・鉄鏃・刀子などの鉄製品や10点程度の玉類がみられる程度である。鉄製品は1①の鉄刀や75①の布を4重以上にまいた鉄剣のように，布が付着して残っている例が多かった。鹿角に直弧文を施した鉄剣（28①）なども出土している。

これらの古墳の分布状況をみると(**挿図354**参照)次のような地形との関連がうかがえる。即ち，遺跡内には中央にL字状にのびる小高い丘陵があって（これを仮りに「**中央丘陵**」と呼ぶ）中央のやや窪んだところ（これを「**中央低地**」と呼ぶ）をとり囲むように弧を描いている。高まりはこれを中心として西側の1号墳地区，北東隅の71号墳周辺，さらに南東の8号墳東側に向けてしだいに低くなっている。古墳はこの高まりに沿ってほぼ集中して並んでいるものと思われる。逆に竪穴住居の分布をみると（**全体遺構図**参照）これらの

古墳の並ぶ地区には比較的少なくて，やや窪んだ「**中央低地**」や北東・南東の面に広がっている。多くの古墳のうち出土した須恵器から時期が6世紀後半と判断しうるもの（8・24・25・12・2号墳）についてみると，「中央丘陵」の東や南東側の裾部に位置している傾向がうかがえる。他の古墳は27・28・1・86・11・58・10・3・4号墳が5世紀後半と考えられる以外遺物を伴わず時期判定をしがたいが，調査区の全域に及ぶものと思われる。

これらは周溝を持ったり，微かに切りあうものがみられる。調査で確認される周溝の掘り方は，おそらく本来の掘り方上面より低い位置で確認されるであろうから，古墳相互の接し方，切り合い方は本来はより度合いの強いものと考えねばならない。こうした状況は古墳間の破壊を示す，というよりむしろ古墳相互の緊密さをより強く示すもの（周溝を共有する等）であると考えるべきだろう。

これに対して明らかに他の古墳を破壊している例もある。南東側での85・87号墳と8号墳は，8号墳が両者を（特に87号墳についてはその中心主体を）切っている。このような切り合いをもつ例は他にはみられない。さらに8号墳下にはその周溝と同心円状に2条（もしくは3条）にめぐる溝があり，断面的に十分に観察できなかったものの一応，下層の溝→87号墳→8号墳と古墳が次々に造られたものと考えられる。二重周溝をもつ例は12，76号墳でみられ，86号墳も可能性がある。8号墳下層の溝の性格は判断できないが，これを古墳と考えるなら2度の古墳破壊（87号墳による下層古墳の，8号墳による87号墳の破壊）があった事になる。また87号墳が下層の溝より先行すると考えたとしても，87号墳に対する古墳破壊と8号墳そのものが数度に及び築造されなおしたと考える事になる。

この問題のうち，8号墳による87号墳破壊はおそらく両者の時期差によると考えたい。**表21**で示したように8号墳は24，25号墳と並んで6世紀後半に築造されたものと考えうるがゆえである。85・87号墳の時期は不明だが，須恵器を伴っておらず，8号墳に先行する時期（5世紀後半～6世紀？）であることは確実だろう。すぐ南の86号墳は須恵器・土師器から5世紀後半と考えられる。先程の分布状況から考えあわせると，5世紀後半代の古墳がほぼ全域に広がるのに対し，6世紀後半代の古墳が東や南東側に集中するとすれば，一部の場所でのみ比較的新しい時期の古墳が築造され，かつてあった古い時期の古墳（といってもほとんど墳丘をもたない）を破壊したと考えてよいのではなかろうか。遺跡全体としても6世紀前半代の須恵器の出土量は少なく，この時期を空白期として，古い時期（5世紀後半）と新しい時期（6世紀後半）とに分けて考えてもよいかもしれない。

埋葬施設は，箱式石棺では側辺に4～5枚の板石を用いている例が多い。また一応木棺墓と考えたものについては明確な木棺痕跡を認め得たものはなく，二重の掘り方を確認しえたものを木棺墓と判断した。また石棺状に検出されたが，板石が全体を囲んでおらず中央で木棺状の方形の掘り方を確認した例が数例ある。「石立て木棺墓」と呼んでいるものであ

る。[注1]またいわゆる壺棺と呼ばれる埋葬施設も検出したが，これは「土器棺」として報告した。

周溝は高い側よりむしろ低い側に掘りこまれた例が多い。また1号墳付近で石釧が出土しており，「中央丘陵」には前方後方墳と同時期か先行する古墳があった可能性もあろう。

注1　木棺の外側に板石をたてたものと思われる。石槨内に木棺を納めたと考えるべきだろう。

〈土器枕・石枕について〉

埋葬施設内では石や土器を利用した「枕」と考えうる設備が認められた。その内訳は土器を利用した土器枕11基，石を利用した石枕32基である。これについてそれぞれ**表22・23**で示した。

一般に「枕」とは，横たわった人体の頭部を安定させる器具もしくは設備である。死者を土葬する際に，埋葬のための施設内にそのような器具もしくは設備を置く事は十分可能性のある事である。他の時代，世界はともかく，古墳時代においては石や土器を用いた「枕」を作った例は，近年特に多く知られつつある。V字状に板石を組んだ所謂（いわゆる）「V字状石枕」を含めた石枕については従来から多くの知見があるし，土器枕（特に土師器枕）について瀬戸谷 晧氏の集成があり，学ぶところが多い。

このような枕についての名称はまだ十分整理されたものではないと思われるが，ここでは土器を利用したものについて「土器枕」，どのような形態のものであろうとも石を利用したものについては「石枕」[注2]と用い，特に当遺跡で多くみられる高坏使用の枕を「高坏枕」，板石をV字状に組んだ枕を「V字状石枕」[注3]と呼ぶことにする。

〈土器枕〉（表22）

土器を枕に利用した例は11例確認された。そのうち8例が土師器高坏を利用したもので3例が須恵器蓋坏を利用したものである。[注4] 須恵器については詳しくは判らないが，土師器を利用した枕の分布は前述の集成によると偏山陰周辺的な（但馬・伯耆を中心とする）分布を示すと考えられる。これらの内には甕を倒立させ底部を欠いたものや鼓形器台の一部を欠いたもの等もみられる。指摘されるように，長瀬高浜遺跡例は完形の高坏を2個もしくは3個組合わせて枕を構成している点で他例と異なる。氏の集成例に加えて昨年度の調査で71号墳第1埋葬施設例（以下単に71①例と記す，他も同じ）と今年度調査で86②例の2例が増えた。71①はV字状石枕（？）の上に脚を欠いた高坏を1点置いている点で当遺跡の他例と唯一異なるが，脚を欠く高坏を用いる点などは他地域の例と外見的に共通する。86②例は3個の高坏を組合わせたものだが，中央の高坏（本編P147，86号墳挿図205，P。13）は，口径の小ささもさることながら，通常の形態とはかなり異なるものである。須恵器枕は今年度調査で24⑥例が加わった。須恵器蓋坏を用いた枕は蓋と身を各1個並べる例が多いようだが，この例は身を2個ならべている，また2号墳①例のうち東側のものはV字状にたてており，珍しい例と思われる。

ところでこれらの遺物出土状況を，実際に枕と認定するについては，①本当に枕であったもの②偶然もしくは単にその位置に遺物があったもの　との識別が容易でなく，なかなかの困難を伴う。しかし原則的には，頭蓋骨がその上に遺存しているもの，ないし頭蓋骨そのものは遺存していなくとも上記の状況が想定できるものは，枕もしくはその一部と考えてよいのであろう。しかしながら仮りに全ての骨が遺存しているとして，その状況から枕としか考えられないとしても，あるいは何かをその上に置き更にその上に頭を載せていたのに中間物が消失したと考えることもできる。その場合残存した下の施設は枕そのものでなく枕的施設（もしくは枕の一部，下部施設）と呼ばねばならないのである。またこの枕でない「施設」に別の性格を考えるとしても，ではその性格が枕そのものの性格とどう異なるのか判断しがたい。従ってここではこれらの「枕」的状況を示す「施設」について内容を検討する作業は判断停止して，一様に「枕」と考える事にしたい。

当遺跡の土師器枕は，**表22**で示したように一例を除いて完形の高坏2～3個を組み合わせて構成している。8例の内で頭蓋骨を残すのは2例，歯もしくは足の骨が残るのは6例あり，頭蓋骨が残っているものから推測して枕と判断した。3個を組み合わせたものは1個を中央におきそれに後頭部を納め，側頭部を両側の2個で支える形をとる。中央の個体は，両側のより大きいものを用いている例（9①例）と小さいものを用いている例（それ以外）があり均一でない。大きいものの場合，両側のものは頭部に接しておらず，また小さいものについても両側のものが頭部をおおう機能を実際にもっているかどうか疑問である。2個の例については頭蓋骨が遺存した例がなく歯片が残っているが，この場合は両側から頭部を支えたものと思う。これらはいずれも脚まで完全にある完形の高坏で構成される。これに対し71①例は脚柱部が上部わずかにあるだけで脚裾部は全くない。坏部は完形である。これは板石をV字状に組み合わせた窪みに斜めにのせられていて，その坏部の角度・位置は，3個の高坏で構成された枕の中央の高坏の状況とほとんどかわらない。この例も歯片だけなので詳しくは判らない。これは一見するとV字状石枕と土器枕の融合形態とみられるが，後述するように本質的には土器枕に含まれるものだと考える。

土器枕は遺構に伴なう施設である以上，その土器は遺構が作られた時期を最も明確に示すものだろう。高坏の時期はなかなか判断しがたい事もあって，詳しい時期は今後の検討を待たねばならないが，他の共伴遺物から考えてこれらの施設をもつ古墳・墳墓の時期は土師器枕については5世紀後半（須恵器を伴う時期）で，須恵器枕については6世紀中～後半（陶邑IIの3～4）と考える。6世紀代の土師器枕が見られない事は，どんな種類の土器を用いるか自体に意味があるのでは無いことを示唆すると同時に，むしろ枕に使われる土器の種類の変化は当時の土器の利用状況に対応した結果であると思われる。つまり土師器と須恵器の生活における利用度が6世紀代になると，急激に変化して須恵器がより日

常的（正確にはそうではないが，量的に増加するという点で）になり，土器を用いて枕を作るという習俗をもつ人々が容易に土師器高坏を須恵器蓋坏に変えたと考えられるのではないか。こうした使用土器の変化は，従って土器枕の理念がむしろ変化なく存続した事を示しているものと考えうるのではないか。須恵器を含めた土器枕としての集成が必要だろう。

〈石枕〉

石枕は32例確認した。いわゆる「V字状」の石枕で，長方形もしくは3角形の板石や丸石を組み合わせたものである。単にV字に2枚の板石を組んだものの他，その上に板石をおきV（逆A字）状に組んだ例，V字状の上にさらにV字状に組む例，板石・丸石を三方にたてかけてコの字状に囲う例(32①・14)，2枚の板石を垂直にたてならべて頭を支える例（84)，平石を平面的に一枚もしくは数枚敷く例（27①・20）がある。これらに利用された石はおそらく埋葬の際に都合のよい大きさ・形の板石を使ったのだろう。箱式石棺の数・石材使用量を考えると，そのような石を入手する事は極めて容易だったと思われる。これらの32例のうち頭蓋骨が完全に遺存し石枕に載っていたのは5例（5①・36・75①・78①・84）で，歯が残る例は8例ある。石枕例とそれ以外の枕を利用した墓との時期差はわからない。また**挿図356**で判るように小形の石棺でも石枕をもつ例（番号に下線をひいたもの）は多い。

〈枕についてのまとめ〉

埋葬施設における枕の状況を概観した。これについて更に検討を加えたい。ここで枕についての本質をあらためて考えておく事は大切な事である。それは死者の頭部を安定させるものである。枕を作る場合まず念頭に置く事は，それが十分に頭を安定させ，そして勿論それ自体も安定する事であろう。土器枕や石枕の様々の形態・形状はこの何らかの手段によって頭を安定させるという本質的機能の点に還元して考えねばならない。

単に平たい石を敷くのは，何も置かないよりは高さをもつ点で有効であろう。(本を枕にするのと同じである。)それよりも中央に窪みを設けるのはより有効である。その場合にV字状に組むかコの字状に組むかはアイディアの差にすぎないかもしれない。ただコの字状の例は土壙墓のみに見られ石棺にはない。これは両側にたてるべき石は，石棺の場合側壁で代用できるし，V字状に組み合わせやすく簡便である事によるものと思われる。石棺にV字状に石を組み枕とするのは，極めて簡易で有効な手段だったと考える。このV字状の上にさらに板石をおいたV（逆A字）状の例がある。78①では頭蓋骨が底部まで完全に遺存し，後頭部（延髄上部）が板石の上にのっていた。このように板石をおけば，後頭部がやや高く顎をひく状態になるから，単にV字状であるより安定度は強まるだろう。V字状にさらに石を組みあわせたものも，これと同様の効果をもつだろう。従って石枕の形状差は，安定性を高める様々な試みの結果を示していると思われる。

このような観点から土器枕をみてみたい。本来土器は直立させた上で物を容れる容器(もしくはその台)である。故に，本来の状態で枕に使う事はかなり困難だろう。壺・甕類をそのままの状態で枕とするのは殆んど無意味な行為だろう。土器枕の諸例を管見すると，一部を打ち欠いて頭部が納まり易くしたものが多い。この事と先にあげた枕の要件(頭部を安定させ，なおかつそれ自体も安定する)を考えあわせてみる。石枕の場合，頭部を安定させる要件さえ整えれば枕自体の安定性はほとんど問題ない程確実だろう。しかし土器を利用する場合，例えば口縁部に頭を入れるのはイメージとしては容易だろうに(子供が土器をかぶるのを考えてみよ)その場合土器は斜めにたてかけられる事になって，下を打ち欠いたとしても枕としての安定性は著しく劣り，かつ甕などは破損しやすく機能しなくなりやすいと思われる。ところが甕を倒立したり，鼓形器台をそのまま立てて頭を入れるべき部分を打ち欠くのは，頭の安定も枕としての安定性も極めて高いものとなろう。これはできたのを見れば成程と思うが，実際には容易に思いつけない抜群の発想だろう。

高坏を用いる場合はどうか。高坏は甕・器台とは異なって，直立させ打ち欠いて，という方法では十分に機能するとは言えまい。但し単に頭を納める点だけを考えると他と比べてかなり密着性が高い形である。従って斜めにたてて安定さえる事さえできれば枕としての利用は十分可能だろう。その場合脚を欠いたものを利用すれば可能であろう。同じ理由で，完形の高坏を数個組みあわせた場合も2つの要件を十分満たすと考える。この状態での高坏枕の安定度は，脚を打ち欠く場合より，かなり高まると思われる。

こう考えると71①の例のように石枕(?)と高坏を組みあわせた例が理解できる。つまりこの場合頭部の安定は高坏坏部で，枕の安定性はV字に組んだ枕の石で果たせる。従ってこの枕の石は安定しない高坏坏部を安定する為に設けられた枕の付属設備と言える。

以上のようにみると，枕は頭を安定性よく固定する設備であり，逆に実際の事例として出てくる枕の諸形態は各々本来の本質の変容したにすぎない，多様なものとなると考えるべきだろう。

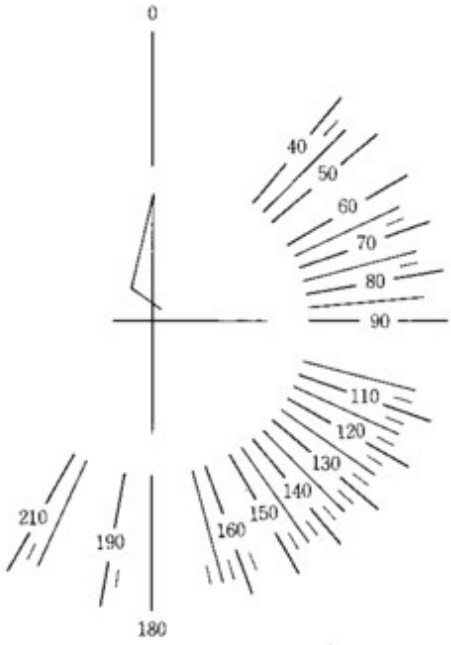
〈埋葬施設について〉

次に埋葬施設と枕との関係を含めて，埋葬施設について考えたい。**挿図356**で示したのは石棺の形態と内法・枕の形態である。**表20**では頭方位を示した。いずれもゴチック体は箱式石棺，ローマン体は土壙・木棺墓，イタリック体は円筒埴輪棺を表わし，各々[—]は古墳の中心主体，(—)は周溝内にある埋葬施設，＿＿は石枕，……は土器枕をもつ事を示す。

これによると箱式石棺の大きさは8①(8号墳第1埋葬施設)の190×100cmを除くと，全て190×80cmの規模内に直線的に並ぶ。これに対し土壙墓などは箱式石棺を一回り大きくしたものと考えうるが，厳密な数値でない可能性もあり，とりあえず除外して考えたい。石棺についてみると，大きく分けて長辺100cm以下・以上に分けうるだろう。さらに各々は

頭方位	
40	(04⑤), 〔24①〕, 29②
42	58② ,
45	02⑤ , (89②),
50	11② ,
52	(03⑤),
60	(04③), 〔88①〕
65	04② , (83)
67	(02⑥),
70	31 , 72
75	〔30①〕, 84 , (81②),
77	82 ,
80	(39), (55)
85	(30②), (45), SXA07
87	66 ,
90	〔02①〕, (46), SXA08
92	17 , 〔22①〕, 〔 47 〕, 〔64①〕, 81③ ,
95	(35②), 52
105	02② , 〔08①〕, 〔25①〕, (48), (49), 53 ,
107	〔01①〕, 〔85①〕
110	〔03①〕, 〔03③〕, 18 , 23 , 〔25②〕, 〔35①〕, (40), 59 ,
112	〔10①〕,
115	〔03②〕, (50), (44), 61 ,
117	20 , 33 , 19 , (43), (54),
120	15 , 16 , (57), 78 , 〔87①〕
122	〔28①〕, 29① , 74 , 〔75①〕
125	〔04①〕, 69 , 〔86①〕
127	〔62①〕, 80
130	08③ , 60 , 〔76①〕, 〔77①〕, 86②
132	(03⑥), 21 , 79
135	56 , (77②), 〔81①〕, 90
137	02④ , 38
140	08② , 12① , 〔27①〕, (42), 〔71①〕
142	〔09①〕,
145	〔05①〕, 14 , 34
147	〔32①〕, 68
150	7③ , (10③), (51), (53)
157	7② , (58①)
160	(03④), 24① , 36
162	02③ , (41),
165	(04④), 13
167	37 ,
180	24③ , 76②
187	(1号墳石蓋土壙)
190	(65)
205	(07①), (25③)
207	(10②), 35③ , 64②
210	24⑤ , 70
212	11①

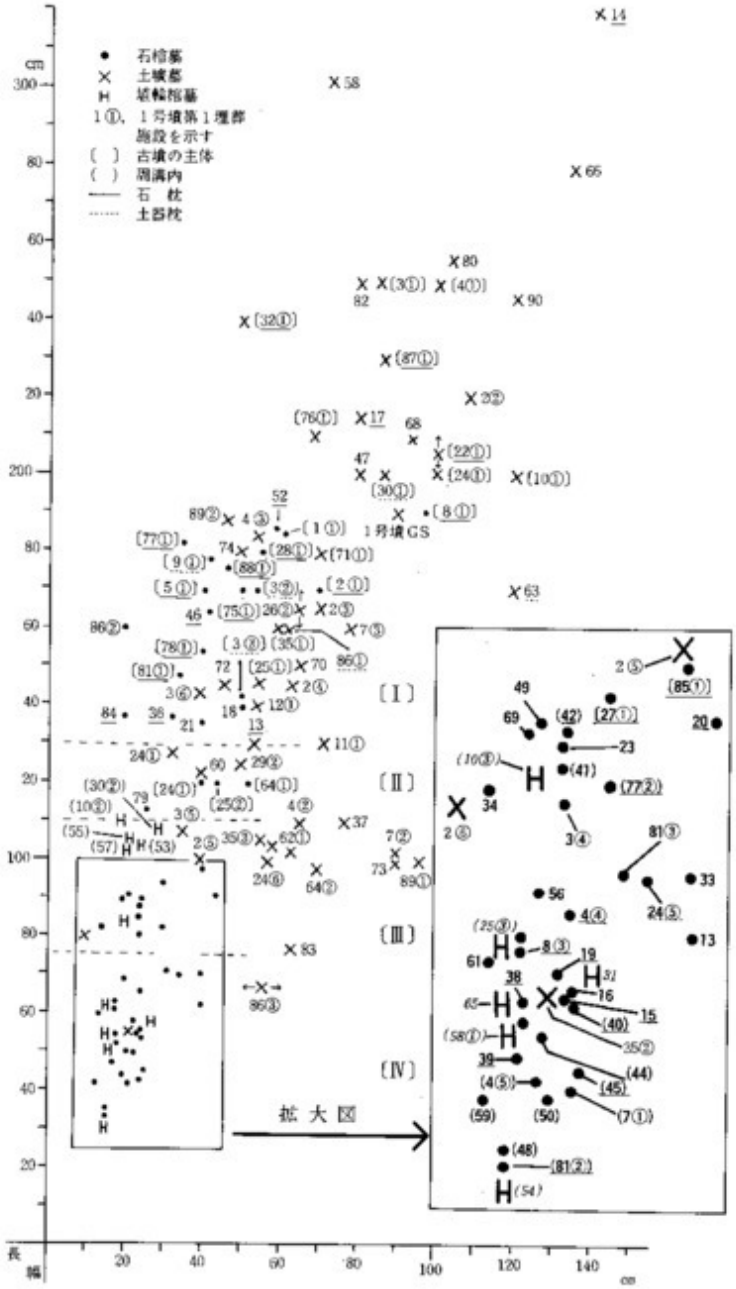
表20　埋葬施設　頭方位
（表記は挿図356 に準ずる）



挿図355　埋葬遺体頭方位図
（方位の単位は2.5度で分けた）

古墳時代	前後	前半後半	陶色		
前期 (5C) 中				方形周溝墓 SX29	↑ 長瀬高浜古墳時代墓群 (土師器編年) Ⅰ期 Ⅱ期 Ⅲ期
				前方後方墳 SX26	LSD 16K 埴輪群 ↓
期 (6C)		後半	Ⅰ-1		
			-2	04 , 86(号墳)	
			-3	03 , 9 , 27 , 28 , 71	
			-4	01 , 88	
			-5	10 , 58	
後期 (7C)		前半	Ⅱ-1	88	
			-2		
		後半	-3	8	
			-4	24 ↕ 2	
			-5	25	11BSK01
			-6		
(8C)			Ⅲ-1	SXA07	

表21　古墳群　編年表



挿図356　埋葬施設内法図

ゴチック体は　箱式石棺　　ローマン体は　土壙・木棺
〔　〃　〕は　〃　で　古墳中心主体　　〔　〃　〕は　同左
(　〃　)は　〃　で　古墳周溝内　　(　〃　)は　同左

イタリック体は　円筒埴輪棺
(　〃　)は　周溝内

13　は石枕
68　は土器枕　をもつ事を示す。

ただし土壙墓・木棺で枕をもつものは枕から反対側の小口までの値を示したため表24の数値と異なる。

埋葬施設	形態	品種	数	遺存骨	他
土師器枕					
1 ①	C	高坏	3	存	
3 ②	〃	〃	2	歯	
3 ③	〃	〃	3	—	
9 ①	〃	〃	3	存	中央大
30 ①	G		2	歯	
63	〃	〃	2	歯	
71	〃	〃	1	歯	脚欠
86	〃	〃	3	歯	
須恵器枕			※V字に組む		
2 ①	C	蓋坏	2個	歯	蓋・身
24 ⑤	〃	〃	〃	—	〃
68	G	〃	〃	—	身2個

表22　土器枕をもつ埋葬施設
(11例)

4 ①	G	両端にV字状	—
④	C	V字状	—
5 ①	〃	〃	存
8 ②	〃	〃	歯
13	G	〃	—
14	〃	コの字状	歯
15	C	V字状	—
17	G	〃	—
19	C	〃	—
20	〃		—
27 ①	〃	平石	歯
28 ①	〃	〃 2枚	—
32 ①	G	〃 数枚	歯
35 ①	〃	コの字状	—
36	C	V字状	存
38	C	〃	骨片
39	〃	〃	—
40	〃	〃	—
42	〃	〃	—
45	〃	〃	歯
46	〃	〃	〃
52	〃	〃	〃
69	〃	〃	—
75 ①	〃	逆A字状	存
77 ①	〃	V字状数枚	歯
〃 ②	〃	逆A字状	〃
78 ①	〃	〃	存
81 ①	〃	〃	歯
③	〃	〃	—
84	〃	垂直に2枚	歯
85 ①	〃	V字状	—
87 ①	〃	コの字状	歯
88	〃	両端にV字状	〃

表23　石枕をもつ埋葬施設
(33例)

〈形態〉は埋葬施設の形態を示す。
C　石棺
G　土壙墓

二つに区別して(Ⅰ)135～190cm以上，(Ⅱ)120cm前後，(Ⅲ)80～100cm前後(Ⅳ)70cm以下の4つに区別できると思われる。

これらのうち古墳の主体となっているもの（図中の［　］で示したもの）についてみると27①・85①以外全てが(Ⅰ)もしくは(Ⅱ)に属する。そして(Ⅰ)の石棺ではその内で86②・21・18を除く全て（17例）に枕が認められる。同じく(Ⅰ)のうち古墳の主体でないもの（周溝の認められなかったもの）は84・36・21・18の4つの他は52・46と88①である。次に(Ⅱ)をみると，古墳の主体でないのは79だけである。枕は伴わない。

(Ⅲ)には11基の石棺が属する。このうち6基に枕（石枕）がある。(Ⅳ)には25基の石棺が属する。このうち最小のものは81②・48の35×15cmである。(棺として最小は円筒埴輪棺ＳＸ54の30×15cm）これを除くと(Ⅳ)は長さ40～70cmの範囲内に収まる。このうち枕をもつのは24⑤の須恵器枕1例の他に10例がある。

これら4グループについて遺存した遺骨から推定しうる被葬者との関係はどうだろうか。(Ⅰ)はほとんどが若年以上の成人である。(Ⅰ)のうち小さいものと(Ⅱ)・(Ⅲ)について検討してみる。このうちで被葬者年令の推定しうるのは79の女・6～7才，27①の10才代，42の4～5才，49の6才未満，34の10才，41の6～7才である。25②は3体が埋葬されていたが，棺の中心的位置にあったのは少年前期の遺体である。とするとこの範囲(80～140cm）の石棺は被葬者の身長にほぼ相応した大きさで作られていると言えよう。

(Ⅳ）に属するのは70cm以下の小石棺である。これらの内で被葬者年令の推定しうるものは7①の壮年，50の成人，56の若年の他は43の2～4才だけで極めて不明である。しかし枕をもつ例はほぼ半数で比率としては（Ⅲ）と変わらない。枕をもつ事を直接遺体を埋葬したものとするのは，逆に大きなものでも枕をもたない例があるから根拠とならないが，7①・50が成人骨で枕をもたない事から一応可能性があろう。少なくともこの2例については遺体を直接埋葬したのではなく収骨した再葬墓であると言えよう。円筒埴輪棺は単棺は(Ⅳ)に，合口式は（Ⅲ）もしくは（Ⅱ）に属すと考えてよいだろう。

以上から古墳の主体であるものはほとんど全てが枕をもっており，成人を直接埋葬したと考える。その場合，27①のように古墳の主体に若年者が埋葬されている事，79も単独で周溝をもつ可能性が高い事を考えあわせると，若年（少年）者に対しても古墳（「有墓域墓」）を作る事はあったと考えるべきだろう。また（Ⅰ）に属するもの，（Ⅱ）あるいは（Ⅲ）に属する例についても，各々有墓域墓の主体であったと考えてよいと思う。

また被葬者について女性と判明したのは3①・5①・79・1①で4例にすぎないが，逆に男性と判明したものも9①・18・84・86②・47の5例にすぎず，これらの遺存例が(Ⅰ)・(Ⅱ）に属する事は，有墓域墓の主体としては特に男女の差別はないと言うべきであろう。

	形態	規模（内法cm）	頭方位	枕	副葬品他	塗彩	遺存骨	性・年
1号墳	円	24 (33.3) −2						
①	C	185 × 61 −30	107E	P 3	鉄刀1 竪節1 礫床	赤	1体分 朱塗	女 熟年後半
2号墳	円	15.8(26.4)−3.7						
①	C	170 × 70 −60	90E	Pス	鉄鎌・刀子・蓋坏		B・T少	?
2	W	220 ×108 − (340×166)	105E				— —	— —
3	G	165 × 70 −17	163E				—	—
(4)	G	145 × 63 −18	136E				—	—
(5)	W	100 × 40 −20 (159× 75)	45E 67E					
(6)	G S	80 × 10						
3号墳	円	20 (26) −1.75						
①	W S	250 × 85 −?	110E		鉄鏃他		B・T少	壮年前半
②	C	170 × 54 −74	114E	P 2	紺色ガラス玉13		〃	女壮年？
③	C	142 × 50 −46	110E	P 3	水晶勾玉1	赤	1体分	女9～10
(4)	C	(80)× 24 −20	160E			赤	—	—
(5)	W	108 × 35 −13 (170)× 97 −50)	52E				—	—
(6)	W	143 × 39 −22 (204×100 −13)	132E				T少	?
4号墳	円	15(21.4)−2						
①	G	448(250)×100 −13	124E	S·S	鹿角装直刀1 鎌・釣針？		B・T少	
②	G	110 × 65	65E				〃小	
(3)	W	184 × 54 −8 (346× 90 −12)	59E	P？	長頸壺・高坏		—	
(4)	C	66 ×24(30)−20	164E	S V			—	
(5)	C	44 × 20 −18	141W				—	
5号墳	円	10.2(13)						
①	C	170 × 40 −30	144E	S V	滑石小玉20		H完	女 若年
6号墳	円	? (13?)	?	?	?6C末			
7号墳	円	17 (23)						
(1)	C	43 × 24 −10	26E				B	壮年前半
2	G	102 × 90 −60	156E					
3	G	160 × 78 −38 馬墓3基	150E					
8号墳	円	13.4(16.8)−1.4						
①	C	(190)×(97)−(46)	106E				B・T片	
2	C	53 × 18 −18	139E	S V	石枕に赤色付着		B	
3	C	61 × 18 −18	130E					
9号墳	円	10(12.8)						
①	C	178 × 42 −32	142E	P_3	鹿角装刀子1	赤	H完	熟年 男？
10号墳	円	12(17)			5C末			
①	W S	275(200)×120−80(30)	112E					
(2)	H_2	(140)×18(22)	27E					
(3)	H_2	84 ×20(24)	151E					
11号墳	円	10(14)						
1	W？	130 × 71 −31	33E					
2	W？	102 × 63 −30	48E					
12号墳	円	12(17.2)	二基の周溝		6C			
1	W？	140 × 53 − (183) (88)	140E					
13	G	140 × 53 −15 (167)	164E	S				
14	G	320 ×140 −30 (504)	145E	S	硬玉・管玉1 4C後半			
15	C	55 × 23 −28	120E	S V				
16	C	(56)× 26 −24	120E	—				
17	G	230 × 80 −12 (246) (64)	93E	S			T・少	
18	C	140?×50?−	110E					
19	C	58 × 22 −17	120E	S		赤		
20	C	90 × 44 −40	117E	S				
21	C	136 × 40 −32	132E			赤		
22号墳	円	8 (10.4)?			5C後～6C初			
①	W S	? ×100 −30	92E	S V				
23	C	88 × 24 −30	110E				H・B少	
24号墳	円	14 (18.6) −2						
①	C	120 × 40 −50	161E				B・T	?
②	W S	200 ×100 (?)	40E		板石床		—	
③	C？	?	0E				—	
4	P	—	—				—	
5	C	70 × 35 −27	208E	Pス				
(6)	W？	75 × 57 (180× 74 −20)			1号,男,壮年後半			
25号墳	円	14.8 (17.8)	104E		2号,女,青～壮年			
①	W S	146 × 54 −20	110E		3号,?,少年前期		B・T	3体分
2	C	120 × 44 −32	25E		刀子1			
(3)	H_2	(67)× 15					—	
26号墳	前方後方	30 ×17(8)			葺石,家形埴輪			
①	H_1	—	—		5C前			
27号墳	円	6 (6.8)						
①	C	94 × 30 −30	139E	S	管玉4,須恵器 把手付椀,5C後半		B・T	? 10才？
28号墳	円	9.2(10.8)						
①	C	180 × 55 −42	122E	S	鹿角装鉄剣1 鎌1 5C後		T	20代
29	方形周溝	9.8						
1	G	128 × 32 −42	122E		4C			
2	W	125 × 50 −19 (206)(112) (41)	38E					
30号墳	円	8.4 (9.76)						
①	G	(264)× 86 −20	74E	P 2			T	若年
(2)	H_2	108 × 28 −40	86E				T	〃
31	H_1	58 × 27	70E					
32号墳	円	8.8 (10.4)						
①	W	292 × 50 −40 (508) (116)	148E	S	(240cm)		T	若年
33	C	(70)× 40 −20	117E				T	
34	C	83 × 14 −	144E				B・T	10才？
35号墳	円	8.8 (10.2)						
①	G	290(160)×60−	110E	S V	鉄鏃10,刀子2		T	
(2)	H_2	55 × 22	95E		—			
3	G	105 × 55 −	27E		—			
36	C	137 × 32 −20	160E	S V	—		H・B	若年
37	W	110 × 77 −30 (150×120 −14)	167E				B	?
38	C	55 × 17	138E	S V			B	?
39	C	48 × 17 −13	80E	S V	11号墳に伴う？		—	—
40	C	50 × 25 −25	110E	S V			—	—
41	C	85 × 23 −25 (18)	162E		1号墳に伴うもの		下顎骨T	6～7
42	C	90 × 25 −22	140E	S			H・T	4～5
43	C	62 × 40 −30 (30)	120E				T	2～4
44	C	50 × 22	115E				—	
45	C	(45)× 25 −30	85E	S			T	
46	C	164 × 42 −40	90E	S			H	女 壮年後半？
47号墳	円	10m ?			(単独)			
1	W	200 × 80 −(25)	92E				H	男，40代
48	C	35 × 15 −(20)	106E				—	
49	C	91 × 21 −24 (18)	104E		1号墳に伴うもの		T	6才未満
50	C	42 × 21 −(16)	115E				—	成人
51	C	63 × 18 −(16)	150E				—	
52	C	186 × 59 −60 (51)	95E	S V	(単独)鉄鏃8 鉄刀1,鉄剣1		T	?
53	H_2	104 × 24 −(16)	149E				顎骨	幼児 (6～7)
54	H_1	30 × 15 −	120E		1号墳に伴うもの		—	
55	H_2	105 × 21 −	80E					
56	C	69 × 20 −17	135E		(単独)	赤	T	若年
57	H_2	103 × 20 −	120E		1号墳に伴うもの		—	
	Gs	190 × 90 −20	8E				T	成人
58号墳	円	14.4×(19.6)−70						
①	H_1	50 × 16 −	157E		家形埴輪		—	
(2)	G	312 × 72 −8	42E				—	
59	C	42 × 13 −	111E					
60	W	122 × 40 −20 (162) (172) (32)	130E					
61	C	60 × 13 −20	117E				T	?
62号墳	円	10 (12) ?						
1	G	114 × 58 −21	128E					
	G							
63	G	170 ×120 −20 (130)	102E	P_3	刀子1			
64号墳	円	12.8(16)						
①	C	(120)× 52 −?	93E					
2	G？	98 × 70 −22	28E					
65	H_1	55 × 16	11E		高坏			
66	W	280 ×135 −25 (490)	87E				T	
67号墳	円？	?	—	—				
68	W？	258 × 94 −7	146E	PS_2	短頸壺			
69	C	90 × 20 −16	126E	S			T	
70	G	150 × 65 −10	31E		滑石製管玉1 鉄片1		T	若年
71号墳	円？	10.4(14.4)						
①	W	200 × 70 −16 (260) (150)	140E	P(S)			B	?
72	W	146 × 46 −10 (264) (18)	112W		4C後半			
73	G S	100 × 90 −10						
74	G	180 × 50 −14	123E					
75号墳	円	10.2(12)−						
1	C	170 × 50 −48	122E	S	鉄剣(布付着) 滑石小玉2		1体分	若年
76号墳	円	11.6(16)						
1	W S	210 × 68 −(20)	130E				B	?
2	G	? × 65 −	180E				B少	?
77号墳	円	11.9(13.1)						
①	C	182 × 35 −48	131E	S A	玉多数,鉄斧1		H・T	30, 40
(2)	C	81 ×(30)−18	135E	S V	(P. 参照)		T	?
78号墳	円	10 Pn ?						
①	C	154 × 40 −20 (35)	120E	S			H 他	男 30～40
79	C	113 × 26 −33	131E				1体分	女 6～7
80	G？	256 ×104 −16	128E				T	
81号墳	円	8(9)						
1	C	148 × 34 −24	136E	S V	6世紀後半	赤	1体分	男?壮年後半
(2)	C	(35)×(15)−(15)	75E	—			—	—
3	C	71 × 31 −30	93E	S V			—	—
82	G	(400)×(60)−(22) 250 × 80	77E				T	
83	P	77 × 63 −45	65E		須恵器甕		T	乳児 6才未満
84	C	138 × 20 −20	73E	S			H・T	青年後期～壮年前半
85号墳	円	5.4 (6.8)						
①	C	100 × 40 −33	108E	S V	—		—	—
86号墳	円	8.8 (10.4)						
①	G	? × 62 −(15)	125E	P 3				
②	C	(60 × 40 −31	130E		掘り方より刀子	赤	1体分	男？壮～熟
(3)	P	67 ×						
87号墳	円	8.5 (9.9)						
①	G	330 × 85 −20 (450×110 −20)	120E	S V			—	—
88号墳	円	(12?)						
1	C	177 × 46 −32	60E	S·S	両側，石枕 6世紀初	赤	B・T	青後～壮前
(2)	P	× ? −						
89号墳		(18)			5世紀後半			
(1)	G S	100 × 96 −44					犬・シジミ・鼠	
(2)	G	188 × 46 −12	45E					
(3)	P							
90	G	246 ×120 −38	134E		刀子			

〈棺の形態〉
C （=cist） 箱式石棺
G （=grave） 土壙
W （=wooden coffin） 木棺
GS（=stone covered grave） 石蓋土壙
WS（=stone covered wooden coffin） 石立木棺
P （=pottery coffin） 土器棺

〈遺存骨〉
B(=bone) 骨片
T(=tooth) 歯片
H(=Head, sculp) 頭蓋骨
B・T →骨・歯片
〃 少→ 〃 を少量
H完 頭蓋骨が完全に
1体分 人体1体分が
出土した事を示す。

〈法量〉
2号墳 古墳名
1 埋葬施設名
(6) （ ）は周溝内もしくは墳丘外にある事を示す。

〈内法〉
古墳については
「径（周溝総径）―比高差」を示す。
埋葬施設については 内法を
「長辺×短辺―深さ」の順に示した

〈枕〉
P(=pottery pillow) 土器枕（特に土師器枕）
P_3 3個の土器（高坏）で構成されている事を示す。
Pス 須恵器枕を示す。

S(=stone pillow) 石枕（特に板石利用）
S V V字状石枕
S A 逆A字
S·S 両小口側に石枕をもつ

表24 長瀬高浜遺跡古墳群一覧表

〈頭位方向と埋葬施設〉

埋葬施設の頭位方向を**挿図355・表20**で示した。(**挿図355**の線のある部分に1基以上の埋葬施設がある事を示す。表の数字は北より何度東方向に振れているかを示す)この表には全ての埋葬施設が含まれるため,傾向を単純に示す為には今少しの作業が必要である。

周溝内の埋葬施設についてみると,それは周溝に沿う形,もしくは古墳の中心に向かう形におかれているようである。従ってその頭方位は,埋葬施設自体がおかれている位置に支配されて,独立の個別的な頭方位をもつものとは考えがたい。従って周溝内の埋葬施設は(**表24**で(　)で示したもの)除外して考える。頭方位のもっとも多いのはN—110～140°—Eとその前後である。7～8世紀代の墳墓(SXA01～08)の方位を参考にあげたが,これらは**「中央丘陵」**沿いに位置しているから(全体遺構図)方位を考える上では材料となるまい。頭方位がほぼ東西方向にむくのは2①・25①・②・84で新しい時期になると東西方向に近く,古いものは角度が大きいという印象をうけるが十分ではない。

〈まとめ〉

以上,従来個別には触れられなかった課題についてやや冗長に考察した。具体的には各報告書の該当個所を参照して頂くとして,全体的な総括を試みたが十分に述べられなかった。他にも触れるべき事は多い。全体として古墳時代中期中葉～後期(5世紀後半～6世紀末)の古墳群であり,それ以降もしばらく墳墓が作られた後,やや空白期間をおいて平安～鎌倉期?に再び中世墓が営なまれるようになるのであろう。遺物の出土例は少ない。詳しい時期の不明なものも特に5世紀前葉までさかのぼるものも少ないと思われるので,5世紀中葉以降,あまり規模の差のない古墳が次々と作られたのだろう。

この数と時期幅を考えると特定の首長層の墳墓としては数が多すぎると思われる。また3期以上の埋葬施設をもつ例は少なく,中心主体として1基の石棺(や土壙墓)を設ける例が多い。特定の個人(あるいは家族の1世代)のために10m規模の「有墓域墓」を作り,周溝内に小形の石棺や円筒埴輪棺・土器棺を用いて付随的に埋葬していると考えられる。1号墳例はこの形態の極めて発展した例と考えるべきだろう。1号墳の主体が女性である事は興味深い点だが他の古墳主体でも女性例が3例みられ,実際には男女の別なく主体として古墳を営なんだものと思われる。数基の埋葬施設をもつ古墳が3・4・25・24のように直径も高さも規模が大きい事を考えると,意図的に家族墓的なものとして作っているとも考えうる。一方1つの主体しか検出されなかったものはほとんど墳丘をもたない古墳であったと思われる。おそらく当時の地表面を掘りこんで石棺を作りつけ,その周囲に溝を掘ったにすぎないのだろう。その際の労力はそれ程のものではないと思われる。またこの場合,多数の異なる集団が同一場所を同時期に利用したとは考えにくく,同一集団の墓地(ハカヂ)と考えるべきだろう。従って特定の首長層の墳墓でなく,また家族墓としての

性格も比較的もたない，やや下のクラスの層の個人墓的性格の強い古墳が5世紀後半以降集中的に作られたと考えたい。この「下のクラスの層」という場合，より上の層の墓はどこに求めるべきだろうか。

また16K埴輪群・ＬＳＤはこれらの古墳にやや先行する時期のものと思われる。これらの古墳に直接伴う（樹立された）埴輪の検出例はなく，円筒埴輪棺の埴輪と16K埴輪群の埴輪に時期差はないと考えられる事から，古墳に対する埴輪の使用はみられないのに，埴輪群の祭祀としての利用と，棺としての利用のみがみられるという特殊な状況を示している。埴輪と古墳の関係を考える上でも重要であろう。ＬＳＤの性格も遺跡全体としての位置づけをする必要があるだろう。しかし現状では困難で，より周辺の地域を調査して遺跡としてのより広い視野をもつ必要があるだろう。この事は，時期的にも地域的にも幅をひろげた上であらためて長瀬高浜遺跡を把えなおした上で，個々の遺構について考えたい。

注1　瀬戸谷　晧「再び土師器転用枕について」『よみがえる古代の但馬』pp. 167～190

注2　枕を最上位概念とし，次に土器枕・石枕をおく。土器枕は従来の例に従って言うなら，土師器枕と須恵器枕がみられる。これ以上の例がみられないのは，土器と土葬の慣習とがきわめて普遍的な事柄である事を考えあわせると極めて興味深い事である。

石枕については，石を加工したものを石枕とし，枕石等の自然石を利用したものは枕石とする。という考え方があるがこれは語義的・文法的に疑問があり採用できない。何故なら石枕とは「石で作られた枕」であり，まず設備としての枕を提示しそれが石で作られ（設けられ）ている事を示すのであり，また枕石とは「枕の石，枕に利用された石」があり「石であってそれが枕となっている」事を示すのである。枕木・手枕と木枕・枕手とは明らかに違うものだろう。石枕を下位分類する事は必要な事であるが，用語は慎重に使われねばなるまい。これらは石で作られた枕として同等であり，等しく石枕としその中に各種のものがあると考えるべきだろう。その考えが石枕と枕石の用語には十分に示されていない危険がある。

注3　瀬戸谷氏は土器枕の下位概念として「土師器転用枕」等を用いられる。ここでは転用という語義に慎重でありたいために転用の語を用いず，単に「土器（と考えうる土製品，とより厳密には言わねばなるまい）を用いた（利用した）」と称する。転用という語は，本来の目的に既に利用されていたものが2次的に用を転じて用いられた事を示す。転用と専用という言葉は，このような物品に関しては現実にはほとんど識別できない事を考えあわせると，あるいはこれらの土器は枕として用いられるために専用的に作られたものかもしれないのであり，判断できるものではない。従って，ここでは「土師器（利用）枕」として，土器枕—土師器枕—高坏枕の順位で分類する。高坏枕は多分に便宜的な用語である。

注4　注1と同じ，以下特にことわらない。

古墳に関する既報告内容は

報告書	Ⅲ	第Ⅱ章	第4節	ＰＰ．167～222
〃	Ⅳ	〃	第3節	ＰＰ．85～136
〃	Ⅴ	〃	第2節	ＰＰ．42～73
		第Ⅲ章	〃	ＰＰ．86～95
		第Ⅳ章	第1節	ＰＰ．181～202

また人骨の鑑定については

報告書Ⅴ	ＰＰ．299～307	で京都大学理学部		池田次郎　教授
		鳥取大学医学部		井上晃孝　助教授
Ⅵ	ＰＰ．285～312	で　〃	医学部	井上貴央　講師

による鑑定をいただいた。

表24の被葬者性，年令は，これらの鑑定結果を便宜的に簡略化して用いたものである。

ま と め

五年余に及ぶ長瀬高浜遺跡の調査も昭和57年度で一応終了し，この報告書VIによって１つの区切りをつける事となった。調査対象区域は，東西250m×南北240m（６万㎡）で，その他にバイパス地区の調査も行った。本編はそのうち東南隅のＧライン以南，11ライン中央以東の東西35m×南北140m（4900㎡）の通称ｇ地区南側についての報告である。

今年度調査では昨年のＳＢ40（大形高床建物跡）に続いて，32×37mの大形の方形周溝遺構ＬＳＤ，中世末と考えられる25×30（？）mの土塁状遺構と巨大な遺構が続出し，遺跡全体の性格を考える上でも多くの資料を提示してくれた。特に南端区域の調査で中世の陶磁器が出土しているが，それは黒砂層内からの出土遺物である点で，中世墓の時期のみならず，現在の地表面である黒砂層上の白砂の形成時期をある程度限定しうる資料といえるだろう。またそのやや下層で粘土（粘質砂）のひろがりが一部にみられ，その面で奈良時代と考えうる建物跡ＳＢ41・37を検出した。そして，10点余の墨書土器，土師器，鉄製品，金具が出土した事は，昭和55年度に出土した帯金具（報告書IV，Ｐ．200）をあわせて，建物群の性格を考える上で重要な鍵をもつ。これらの遺構や中世の墓群がＥライン以南に集中する理由はわからない。

遺物としては縄文中期にさかのぼりうる土器片が確認された。ごく数点にすぎないが貴重である。また弥生前期（中葉）から中期初頭と考えられる土器資料も今回全体にわたって報告した。刻目突帯をもつ土器等は，一部を除いて突帯をもたない弥生土器と胎土・調整に差がなく同時期のものと考えるべきだろう。木葉文などの資料も紹介した。

今回は弥生前期と考えうる玉作工房を３基検出し，従来知られていたものに加えて４棟となった。弥生中期から後期，古墳時代初頭に至る遺物は今回も殆んど検出されなかったが，これは遺跡全体にわたっても同様の現象である。

これに対して古墳時代の竪穴住居跡は，今回ＬＳＤ周辺で７棟，南側で20棟複雑に切りあって検出した。集落の範囲を確認する事は大きな課題の１つであったが，今回の調査によって，既に古墳群の項やＬＳＤの項で述べたように「中央低地」の集落を一群として把えて，地形の傾斜にそって北東・南東・１号墳周辺と大きく４つの群にわけられると考えたい。西と南の範囲はおさえられるが，北と東は調査範囲の外に及ぶため今後の課題として残された。１号墳周辺のは須恵器をもつものがある事，平面的に方形であるものが多い点，比較的新しい時期に作られているが，場所によって特

に際だって時期差を求めうるものではない。全体に同一の集団の集落が広がるなかで，地形に影響されて低地や傾斜面に住居を営んだものと考える。ただ今回検出したＳＩ149からは６世紀代の土器が検出されており，あるいは新しい時期（古墳の時期と並行するような）の集落が東にあるのかもしれない。あるいは古墳時代初頭以前の欠落する時期の遺構・遺物があるかもしれない。

古墳時代の墳墓については若干触れた。この古墳群はさらに東に拡大されると思われる。ＬＳＤ・16Ｋ埴輪群との関連も明確にできなかったが，将来の課題としたい。その他にＳＢ40（特殊大形建物）や南側の東西に走る溝なども遺跡全体とのかかわりの上ではじめて理解しうるものだろう。

奈良時代から中世に至る遺構が検出されたのも重要である。奈良～平安時代のそれについては粘土面の存在が遺構確認の１つの決め手となったし，困難な黒砂層の層内における面的確認を助けるものであった。この粘土の広がりは１号墳地区で散在的に認められたものと同じような粘土であり，遺跡の南側斜面沿いにこの粘土面が全体にみられるとするなら，南側斜面の粘土層成立で考えた河川氾濫がこの黒砂層内の粘土面を成立せしめた原因と考えうるとも思われる。とするとその時期は７～８世紀と考えられる。土塁状遺構が黒砂最上層に形成された遺構である事は，中世墓とならんで黒砂形成及びその終えんと白砂現砂丘の形成の時期を決める重要な手がかりである。この時期（中世）の遺構確認はより慎重に行なわなければならないだろう。

長瀬高浜遺跡の全体の把握は，周辺で知られている各種の遺物や黒砂層の広がりの確認等によらなければ，広大であるだけにより困難であると言えよう。欠落した時期や，古墳時代前期の墳墓・中～後期の集落地をどこで確認するか，遺跡としての範囲確認とあわせて将来に残された大きな課題といえるだろう。

また鑑定によって牛・馬・貝などの動物遺体が確認されながら，調査時に十分な認識をもたなかったため，それを明確な資料として提示できなかった事は残念なことであった。今回の調査で，７号墳周溝内で明らかに馬が埋納されていたのをはじめとして，多数の馬の骨が検出・確認されている。古墳時代から中世に至る時期に馬が埋葬されたと考えるべきだろう。中世のみならず黒砂の比較的上層の調査も十分に行えたとは言いがたい。これらの上層面の調査が今後より慎重に行なわれる事を期待したい。

調 査 関 係 者 名 簿

財団法人鳥取県教育文化財団

中部埋蔵文化財調査事務所

所　　長　米原　幸正

調 査 員　西村　彰滋・笹尾　千恵子・大賀　靖浩・福嶋　慶純・賀須井　智
野島　珠美・河田　浩介・国田　修二郎・名越　智津子
（以上昭和57年度調査員）

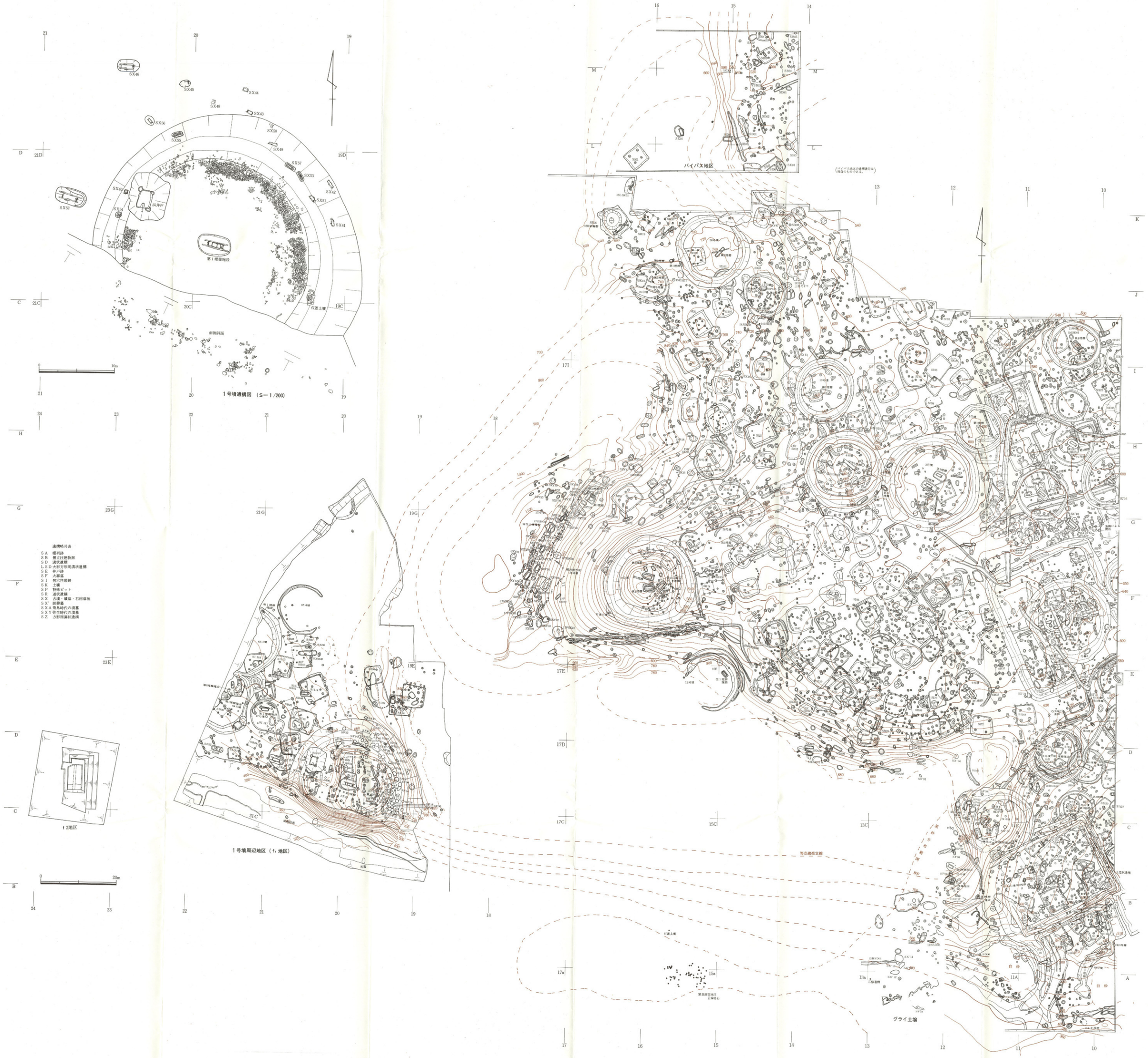
調査指導　故国田　一夫（羽合町文化財保護委員長）
松本　常世・蔵本　知純（羽合町中央公民館）
鳥取県教育委員会事務局文化課・鳥取県埋蔵文化財センター

協　　力　鳥取県教育委員会・羽合町教育委員会・羽合町中央公民館・鳥取県土木部下水道課・倉吉土木出張所下水道課・日本下水道事業団天神川出張所・熊谷組・大成建設・西松建設・浅野建設・鳥取県立倉吉工業高等学校

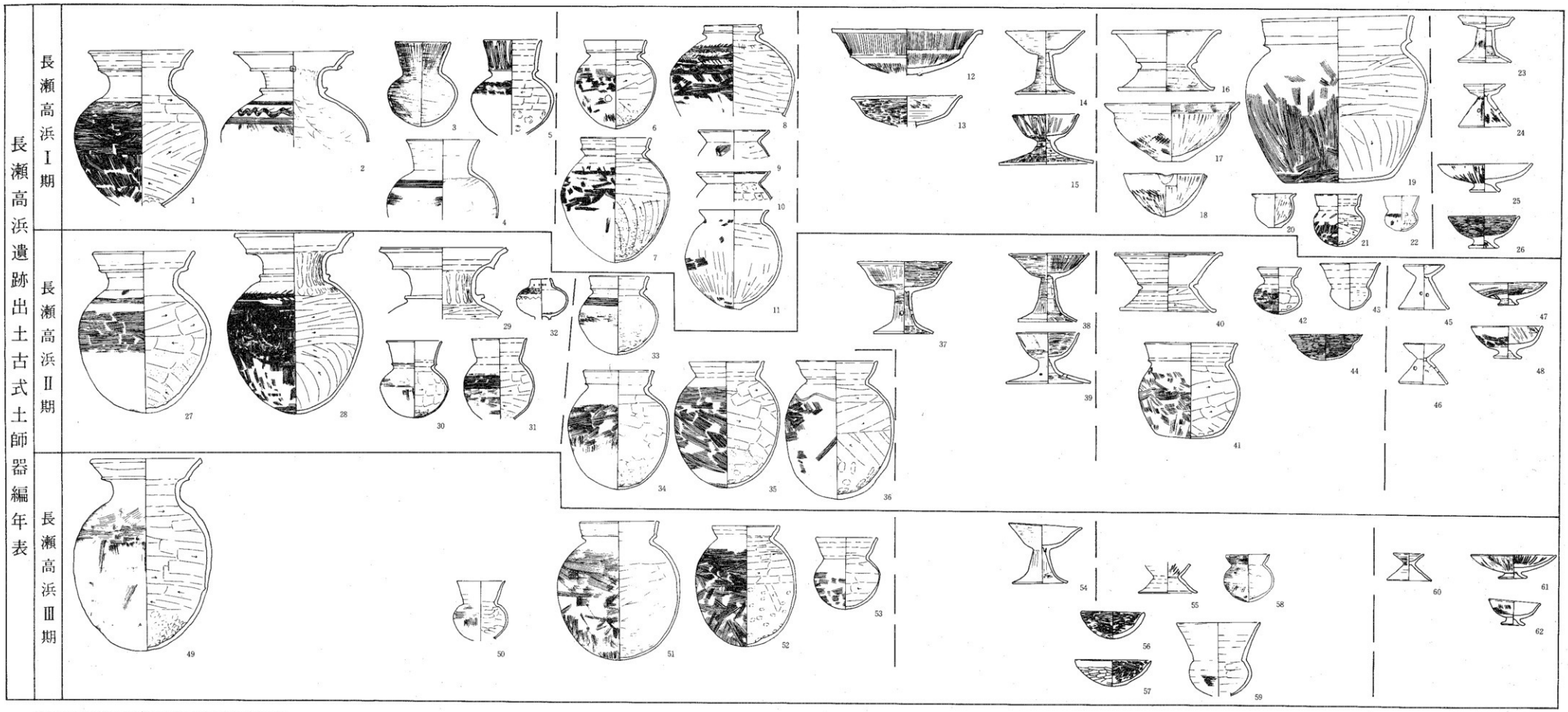
内務作業員　佐々木　良枝・横山　敦子・鈴木　恵子・松本　由香里
廣芳　珠枝・中本　里美・大島　美紀子・福本　園美・秋間　二三枝
吉川　博子・六尾　由紀子・松本　静香

長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI
（本文編）

発行日　1983（昭和58）年8月
発行者　財団法人鳥取県教育文化財団
〒680　鳥取市扇町21
鳥取県社会教育福祉会館内
ＴＥＬ（0857）26―0920
印　刷　㈱　中央印刷
〒680　鳥取市南栄町34



付図1　長瀬高浜遺跡全体遺構図（S＝1/400）・1号墳遺構図（S＝1/200）



使用土器出土遺構名（土器番号は報告書Ⅲで使用したものである）

1	S I61・Po1	6	S I61・Po2	11	S I69・Po87	16	S I69・Po133	21	S I33・Po11	26	S I69・Po119	31	S I48・Po2	36	S I70・Po4	41	S I34・Po12	46	S I12・Po19	51	S I10・Po5	56	S I41・Po15	61	S I51・Po5
2	S I69・Po5	7	S I69・Po16	12	〃 ・Po94	17	〃 ・Po146	22	S I43・Po5	27	S I40・Po1	32	S I42・Po3	36	S I37・Po9	42	S I11・Po4	47	S I05・Po31	52	S I51・Po2	57	S I51・Po6	62	S I41・Po12
3	〃 ・Po15	8	〃 ・Po83	13	〃 ・Po93	18	〃 ・Po145	23	S I69・Po123	28	S I12・Po1	33	S I40・Po7	38	S I05・Po27	43	S I37・Po1	48	S I37・Po10	53	S I10・Po1	58	S I41・Po3		
4	〃 ・Po14	9	〃 ・Po89	14	〃 ・Po96	19	S I33・Po18	24	〃 ・Po125	29	S I05・Po2	34	S I05・Po23	39	S I34・Po14	44	S I32・Po19	49	S I08・Po1	54	S I08付近出土	59	S I06・Po1		
5	S I66・Po1	10	〃 ・Po88	15	S I58・Po9	20	S I69出土	25	〃 ・Po122	30	S I32・Po2	35	S I37・Po6	40	S I05・Po36	45	〃 ・Po15	50	S I06・Po2	55	S I21・Po27	60	S I25・Po40		

付図２　長瀬高浜遺跡古式土師器編年表